

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13753

研究課題名（和文）一時保護所職員を対象にした外部研修プログラムの作成およびSVの有効性の検証

研究課題名（英文）Building an external training program for temporary shelter staff and verifying the effectiveness of supervision

研究代表者

阪無 勇士（Sakanashi, Yuji）

目白大学・心理学部・専任講師

研究者番号：10850969

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：近年に至るまで、一時保護所では具体的なケア・アセスメントの在り方やその意義を明示するような実態調査及び運営指針の策定が長く進まない状況にあった。このため、支援の場面ではケアの視点が不足し、子どもの問題行動と職員による過剰な管理が悪循環する組織風土が築かれ、子どもをケアしたいと願う職員の想いが抑制される状況が生じていた。そこで、本研究では全国調査を行い、ケアの効果が高いとされる「子ども中心の関わり」を高めることに有用な「子ども中心の支援モデル」を作成し、このモデルに基づく研修プログラム及びスーパービジョンを構想した。効果検証の結果、その効果は実証され、人材育成の指標として十分な有用性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一時保護所における職員の専門性は多岐に渡る一方で、これまで職員の専門性を高める人材育成の指標は明示されてこなかった。内部におけるSV級職員の配置やその効果も十分ではなく、一時保護所に関する専門家の存在自体が希少であった。本研究ではこうした支援上の課題が、子どもの最善の利益を考える職員の関わり（子ども中心の関わり）を抑制する現状を明らかにし、職員の10人に1人は子ども中心の関わりを必要に感じられない心理状態に陥る一方、職員の9割が子ども中心の関わりを高める研修を望む状況を明らかにした。本研究で作成した人材育成の指標と実践例は厚労省の調査研究事業の中でも紹介され、既に現場での活用も広がりつつある。

研究成果の概要（英文）：Until now, temporary shelters have not made progress in formulating operational guidelines that clarify the content and significance of fact-finding surveys, care, and evaluations. As a result, there is a lack of a caring perspective at support sites, and an organizational culture is formed in which problematic behavior of children and excessive management by staff create a vicious cycle, resulting in a situation in which staff's motivation to provide care declines. Children are being oppressed. Therefore, in this study, we conducted a nationwide survey to create a "child-centered support model" that would be useful for increasing "child-centered relationships," which are said to have high care effects, and developed a training program based on this model. As a result of validation, its effectiveness was demonstrated, and its usefulness as an indicator for human resource development was demonstrated.

研究分野：社会福祉学関連

キーワード：児童相談所 一時保護所 児童虐待 問題行動 子ども中心の関わり 子ども中心の支援モデル 人材育成 スーパービジョン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

近年、一時保護所の運営指針として「一時保護ガイドライン」が提示された。このガイドラインによれば、一時保護所における支援の大原則は子どものケアであり、職員は問題行動として現れるトラウマや愛着形成の問題へと受容的に関わりながら、子どもが十分なケアを体験できるように努めることが明記されている。しかし、虐待を受けた子どもが示す問題行動へと受容的に関わることは容易ではない。全国の一時保護所を対象にした実態調査によれば、職員の9割以上が子どもの問題行動を受け止めることに苦慮しており、地域によってケアの質に大きな格差が見られる現状が問題視されている。また、国の調査研究を概観すると、一時保護所における職員の専門性は多岐に渡る一方で、職員の専門性を高める人材育成の指標や、一時保護所の特殊性を踏まえた具体的なケアの在り方を明示するような調査研究は長く実施されていない。一時保護所の職員はケアの在り方を学ぶ機会が非常に少ない状況下で専門的なケアを要する子どもへと関わる状況に置かれており、子どもとしては、職員からケアの効果が高い関わりを受ける機会が十分に保障されていない状況に置かれているものと考えられる。

一方、一時保護所におけるケアの効果が高い関わりとして「子ども中心の関わり」がある。子ども中心の関わりを受けた子どもほど一時保護所の生活に安心・安全を感じられるほか、職員との間で安定した愛着関係を形成し、怒りを中心としたトラウマ関連の症状が軽減すること、向社会性が高まり問題行動が改善されることが明らかになっている。また、職員の子ども中心の関わりを高めることに有用な人材育成の指標として「子ども中心の支援モデル」がある。子ども中心の支援モデルは4つのSTEPがあり、「子ども中心の関わり(STEP1)」、「問題の理解と対応方法の検討(STEP2)」、「資源の活用と心理支援(STEP3)」、「支援効果を高める組織運営(STEP4)」の順に職員は成長し、子ども中心の関わりがエンパワメントされる。子ども中心の関わりは子どものケアと職員の人材育成に有用と考えられるが、そのモデル検証は部分的な範囲に留まっている。ケアの地域格差も問題視されており、調査協力施設の拡大が課題となる。

## 2. 研究の目的

本研究では、一時保護所におけるケアの視点に着目しながら一時保護所の支援と現状を整理し、その特殊性を踏まえて作成された「子ども中心の支援モデル」の信頼性・妥当性を検証し、職員の人材育成やスーパービジョン(以下、SV)に対する有用性を検討することを目的とした。

## 3. 研究の方法

研究1：子ども中心の支援モデルの信頼性・妥当性の検証及び実態調査

研究2：子ども中心の支援モデルに基づく研修プログラムの構想と効果検証

研究3：SVを受けた職員の子ども中心の支援スキルが高まるプロセスの検証

研究4：子ども中心の支援モデルに基づくSVの構想と効果検証

## 4. 研究成果

### (1) 研究1：子ども中心の支援モデルの信頼性・妥当性の検証及び実態調査

全国の一時保護所 154 カ所に所属する全ての直接処遇職員に調査協力を求め、未回答を除いて 354 名(平均年齢 41.92 歳 ± 13.78)を分析対象とした。

まず、子ども中心の支援モデルの尺度構成を明らかにするために、回答不備を除いた 353 名の尺度を用いて、先行研究のモデルと同様に各尺度 1 因子構造を想定し、主因子法、プロマックス回転による確認的因子分析を行った。先行研究と同様に子ども中心の支援モデルに基づく 8 つの支援スキル(子ども中心の関わり、虐待の影響に気づく、関わり方の検討、効果的な関わり方の検討、心理的なケアと予防、権利擁護に基づく支援、支援モデルの共有、支援の仕組みづくり)が確認された。信頼性は .80 ~ .89 であった(Table1)。

子ども中心の支援モデルは、STEP1(1 因子)、STEP2(2 因子)、STEP3(2 因子)、STEP4(3 因子)の計 8 因子で構成されている。そこで、高次因子に子ども中心の支援モデルを設定し、下位因子に STEP1 の子ども中心の関わり、STEP2 の問題の理解と対応方法の検討(虐待の影響に気づく、関

わり方の検討)、STEP3 の資源の活用と心理支援(効果的な関わり方の検討、心理的なケアと予防)、STEP4 の支援効果を高める組織運営(権利擁護に基づく支援、支援モデルの共有、支援の仕組みづくり)を設定し、高次因子分析を行った。モデルの適合度は GFI=.96、AGF=.91、RMSEA=.09、CFI=.97 であり、許容される値が示された。子ども中心の支援モデル(実際の支援状況)は、計 8 因子から構成され、STEP1 ~ STEP4 に分類される尺度であることが確認された。

先行研究と同様に、STEP が進むごとに子ども中心の関わりが高まるモデルを明らかにするために階層的重回帰分析を行った。その結果、STEP1 子ども中心の関わり(の説明率(R2)と変化量をみると、変数を投入するたびに STEP2 問題の理解と対応方法の検討(R2=.45)、STEP3 資源の活用と心理支援(R2=.55)、STEP4 支援効果を高める組織運営(R2=.57)の説明率が有意に増加した。STEP1 子ども中心の関わりは、STEP2、STEP3、STEP4 を身に付けるにつれて、より効果的に実践できるようになることが明らかになった。また、STEP が進むにつれて説明率が有意に上昇する傾向は、STEP1 子ども中心の関わりのみならず、STEP2 問題の理解と対応方法の検討、STEP3 資源の活用と心理支援、STEP4 支援効果を高める組織運営のいずれにおいても同様な結果が得られた。STEP1 ~ STEP4 で求められる知識・技能はそれぞれ影響し合いながら身につくものであり、STEP1 ~ STEP4 の順に学習することが効果的であることが明らかになった。

子ども中心の支援スキルの妥当性を検証するために、概念的な関連性が予測される各尺度(内省的な姿勢、共感満足、共感疲労、子ども中心の関わり)との相関係数を求めた。その結果、STEP 1 ~ 4 は、それぞれ内省的な姿勢、共感満足の合計得点、子ども中心の関わりの合計得点、共感疲労の下位因子である援助者自身のトラウマ体験とは正に、共感疲労の下位因子である PTSD 様状態とは負に相関した。このことから、子ども中心の支援スキルとは、子どもの立場で子どもの思いや行動の理解に努める職員が(内省的な姿勢)、援助している子どものトラウマ体験に寄り添い(代理性トラウマ)、子どもの癒しと成長に効果的であることが既に明らかになっている関

Table1  
子ども中心の支援スキルの因子パターン

項目	因子	M	SD	<i>a</i>
<b>STEP1 子ども中心の関わり</b>				
1. 私は、子どもの前向きな気持ちを応援し、成長に繋げている。	.76	4.05	.75	
2. 私は、子どもにとってより良い考え方や表現の仕方を教えている。	.75	4.17	.70	
3. 私は、子どもの様子を察にか、いつでも力になっている。	.73	4.55	.76	.83
4. 私は、子どもの気持ちを大切に思い、真剣に受けとめている。	.65	4.13	.85	
5. 私は、子どもが示す問題を冷静に解決している。	.62	4.41	.83	
<b>STEP2 虐待の影響に気づく</b>				
1. 私は、子どもの物事に対する考え方・感じ方から、虐待の影響に気づいている。	.91	3.87	.83	
2. 私は、子どもの言動から、虐待の影響に気づいている。	.88	4.03	.82	
3. 私は、子どもがストレスに対処する様子から、虐待の影響に気づいている。	.85	4.05	.87	.89
4. 私は、虐待を受けた子どもが用いる特徴的な言動を理解している。	.75	3.95	.90	
5. 私は、虐待の影響に注意を払いながら子どもに接している。	.58	4.50	.85	
<b>STEP2 効果的な関わり方の検討</b>				
1. 私は、自身の関わりについて、子どもがどのように捉えているのかを理解している。	.75	4.40	.99	
2. 私は、支援を通して子どもに伝わるよいメッセージを理解している。	.75	4.55	.93	
3. 私は、自身の支援者としての思いが子どもにも伝わるように関わっている。	.66	3.97	.82	.80
4. 私は、厳しい指導や態度がもたらす影響に気づいている。	.66	4.10	.88	
5. 私は、厳しい指導や態度を行わないように対策をしている。	.56	4.22	.90	
<b>STEP3 資源の効果的な活用</b>				
1. 私は、自身の状態に合わせて関わり方を効果的に変えている。	.80	4.01	.80	
2. 私は、問題行動にひそむ子どもの気持ちに気がつき、行動の意味・目的を理解している。	.72	4.28	.91	
3. 私は、職員の専門性を活かした支援をしている。	.72	3.86	1.00	.81
4. 私は、周囲の人材を活かしながら子どもに接している。	.64	3.90	1.02	
5. 私は、自身の魅力(趣味、特技、人柄、信念など)を出しながら支援している。	.57	4.09	1.09	
<b>STEP3 心理的なケアと予防</b>				
1. 私は、問題行動を示す子どもの気持ちや不適な状況について、適切に理解している。	.73	3.73	1.04	
2. 私は、バーンアウトのリスクが高い職員の特徴を理解している。	.72	3.55	1.02	
3. 私は、職員がバーンアウトしにくい職場づくりを行っている。	.70	3.90	1.07	.81
4. 私は、自身のネガティブな感情を手がかりに、子どもの状態を理解している。	.65	3.98	.82	
5. 私は、自分自身のストレスフルな状態や反応に対して、適切に対処している。	.61	3.71	.96	
<b>STEP4 権利擁護に基づく支援</b>				
1. 私は、子どもの思いを汲み取り、自己表現を受け止めている。	.81	4.33	.73	
2. 私は、生活の中で子どもをケアしている。	.74	4.18	.80	
3. 私は、子どもが自身の課題を認識し、主体的に対処していく力を引き出している。	.71	4.28	.85	.84
4. 私は、言葉の生活の様子から子どもの課題と強みを検討している。	.67	4.37	.81	
5. 私は、子どもの権利が守られるような支援を行っている。	.65	3.80	.88	
<b>STEP4 支援モデルの共有</b>				
1. 私は、職員間の温かい人間関係の結び方を、ロールモデルとして子どもに示している。	.83	3.49	1.07	
2. 私は、職員同士で個性を補い合いながら支援している。	.73	4.02	.94	
3. 私は、自身の困難な状況と向き合い方を、ロールモデルとして子どもに示している。	.70	3.67	1.02	.84
4. 私は、一時保護所の職員像を職員間で共有している。	.68	3.47	1.02	
5. 私は、職場の課題を職員間で共有し、連携しながら対処している。	.64	4.06	1.00	
<b>STEP4 支援の仕組みづくり</b>				
1. 私は、子どもに対する専門的な支援の方法を積極的に学んでいる。	.78	3.80	.98	
2. 私は、一時保護所に求められる施設在り方を積極的に学んでいる。	.74	3.98	1.00	
3. 私は、子どもが安心・安全を感じられるような生活場を築いている。	.64	3.69	1.12	.81
4. 私は、スーパービジョン(教育、助言、心理的なサポートなど)の効果を実感している。	.63	4.31	.79	
5. 私は、子どもが職員から愛情深さを感じられるように支援している。	.61	4.28	.92	

わり方を用いりながら(子ども中心の関わり)、職場の人間関係や自分自身に対する満足感や(共感満足)、自身のトラウマ体験と向き合う覚悟を高め(援助者自身のトラウマ体験)、自身のトラウマ症状をも癒す効果をもつ専門的な支援技術であると考えられる。トラウマを抱えた子どもへの支援に関連する先行研究を踏まえると、部分的に妥当性が確認されたと考えられる。

一時保護所の職員が子ども中心の支援モデルに基づく実践を難しく感じる一方で、研修ニーズの高い職員が多いことを検討するために、子ども中心の支援モデルの実践状況と研修ニーズの平均値を求め  $T$  検定を行った。その結果、いずれの STEP においても子ども中心の支援モデルの研修ニーズの方が実際の支援状況よりも有意に平均値が高い傾向が見られた。支援の実際が理想に追いついておらず、職員が子ども中心の支援モデルに基づく研修を強く求めている状況が明らかになった。

## (2) 研究 2：子ども中心の支援モデルに基づく研修プログラムの構想と効果検証

子ども中心のスキルの内容に応じた研修教材を作成し、実際に研修を行い、研修効果の測定を行った。調査対象者は関東圏の児童相談所一時保護所に所属する職員である。一時保護所職員 36 名に質問紙を配布し、未回答を除いて一時保護所職員 20 名(男性 5 名、女性 15 名、指導員 9 名、保育士 10 名、心理職 1 名、平均年齢  $39.45 \pm 11.26$ )のデータを分析した。

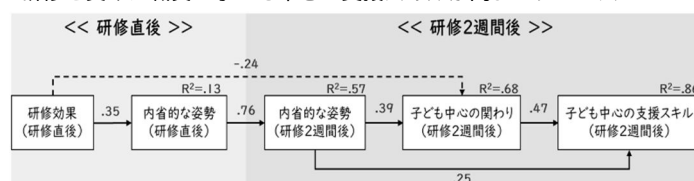
研修前と研修 2 週間後の得点を対応のある  $T$  検定を用いて比較したところ、子ども中心の支援スキルはいずれも平均点が増加傾向にあり、子ども中心の関わり(STEP1)と支援の仕組みづくり(STEP4)を除いた全てのスキルにおいて得点の有意な増加が示された。4 つのステップにおいても同様に、いずれも平均点は増加傾向にあり、子ども中心の関わり(STEP1)を除いた全ての STEP において得点の有意な増加が示された。これらの結果から、子ども中心の支援モデルに基づく支援スキルは研修の受講によって学習可能であり、その効果は 2 週間以上継続すること、また、作成した研修教材についても職員のスキルアップのために有用であることが示された。なお、有意差が示されなかった子ども中心の関わり(STEP1)については、子ども中心の関わり(STEP1)と正の相関を示す「子ども中心の関わり尺度の合計点」では有意な増加が示されている。このことから、調査協力者の人数を増やすことで正の相関が示される傾向が示唆される。また、支援の仕組みづくり(STEP4)については、その内容には個人的な対応の範囲を超えた組織的な取り組みが含まれているため、2 週間という短い期間では得点の大きな上昇には至らないことが示唆される。

次に、研修効果が継続する要因を明らかにするために、研修直後の主観的な研修効果(理解度、有用性、必要性)と内省的な姿勢、2 週間後の内省的な姿勢、子ども中心の関わり、子ども中心の支援スキルを順に投入したパス解析を行った(Figure1)。その結果、研修直後の主観的な研修効果(理解度、有用性、必要性)は研修効果 2 週間後の子ども中心の関わりと子ども中心の支援スキルへ負に影響し、一方で研修直後の内省的な姿勢は研修効果 2 週間後の子ども中心の関わりと子ども中心の支援スキルへ正

に影響していた。モデルの適合度は  $GFI=.98$ 、 $AGFI=.84$ 、 $RMSEA=.00$ 、 $CFI=.1.00$  であり、概ね許容される値が示された。このことから、実践に繋げるような研修効果を期待するのであれば、職員の内省的な姿勢を高めることを意図した研修プログラムの構想が重要であると考えられる。

Figure1

研修を受けた職員の子ども中心の支援スキルが高まるプロセス



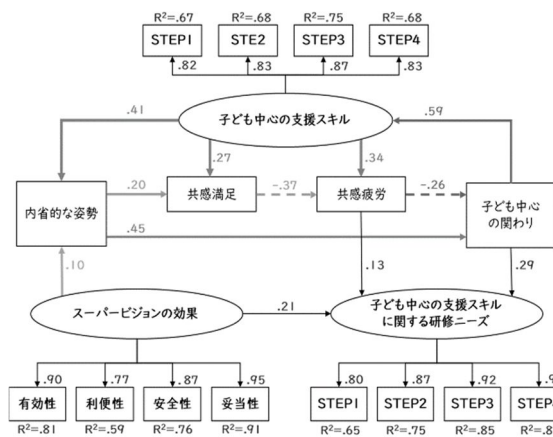
### (3)研究3：SVを受けた職員の子ども中心の支援スキルが高まるプロセスの検証

「SVを受けた職員の子ども中心の支援スキルが高まるプロセス」を明らかにするために、研究1において関連する尺度に回答のあった一時保護所職員317名(男性123名、女性194名、平均年齢 $41.51 \pm 13.46$ )のデータをについて共分散構造分析を行った。SVの効果は内省的な姿勢、共感満足へ正に、共感疲労へ負に影響する「心理ケアのプロセス」、その後、子ども中心の関わりを介して子ども中心の支援スキルの実践状況へと正に影響する「スキルアップのプロセス」、その後、内省的な姿勢、共感満足、共感疲労へと正に影響し上記2つのプロセスを循環させる「自律的成長のプロセス」が示された。

モデルの適合度はGFI=.92、AGF=.89、RMSEA=.07、CFI=.96であり概ね許容される値であった。このことから、子どもと職員の双方の癒しと成長に効果的なSVモデルが構築されたことで、SVの具体的な内容や教材等の構想が可能となったといえる。なお、SVの効果から内省的な姿勢への影響は非常に低かった。現状のSVでは職員の自律的な成長を導く効果が低いため、研究2で職員の内省的な姿勢を高めることを意図したSVの構想が重要と考えられる。

Figure2

SVを受けた職員の子ども中心の支援スキルが高まるプロセス



### (4)研究4：子ども中心の支援モデルに基づくSVの構想と効果検証

本研究では、子ども中心の支援スキルを高めるピアSVを実施し、その効果を検証した。一時保護所職員46名を対象に子ども中心の支援モデルをテーマにした講義とグループワークを行った。なお、職員の子ども中心の支援スキルはメンタライズ能力の指標である内省的な姿勢が大きく影響することから(研究3)、グループワークでは子ども中心の支援モデルの流れを概説したうえで、メンタライズ能力を短時間で回復させるとされる協同的思考法を活用した(Bevington&Fuggle, 2012)。研修前、研修直後、研修2週間後の3時点で質問紙調査を行った。分析対象者は直前・直後の2時点における回答不備を除いた26名(男性13名、女性13名、年齢 $38.92 \pm 10.04$ )であった。t検定の結果、内省的な姿勢と子ども中心の支援スキルは、いずれにおいても研修前よりも研修後で高まる傾向が明らかとなった。次に、SVの効果が継続する要因を明らかにするために、研修直後のSVの効果(有効性、安全性、妥当性、利便性)、内省的な姿勢、2週間後の子ども中心の支援スキルを投入してパス解析を行った。その結果、SVの効果は2週間後の子ども中心の支援スキルを部分的に促進するが、内省的な姿勢を介することで2週間後の子ども中心の支援スキルの下位因子全てを促進する傾向が示された。このことから、職員のSVを実施するためには、内省的な姿勢を高めることを意図したSVの構想が重要であり、また、協同的思考法(Bevington&Fuggle, 2012)の活用が有用であると考えられる。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 阪無勇士
2．発表標題 子どもの癒しと成長を支える関わり方 ～子ども中心の支援モデルの妥当性と信頼性の検証～
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 茂木健司・牛島康晴・阪無勇士・太田義
2．発表標題 児童相談所一時保護所職員に行う研修内容とそのあり方を考える
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 阪無勇士・古川康司・中村正彦・田中淳一・鈴木浩之・海鋒康介・高岡昂太
2．発表標題 中野区児童相談所 小さな一時保護所の大きな挑戦～ SofS・アドボカシー・通学 / 学習支援・心理支援～
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 阪無勇士
2．発表標題 子ども中心の支援スキルを高める研修及びスーパービジョン ～「子ども真ん中」職員を増やす職員支援のモデル検討～
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会第29回学術集会
4．発表年 2023年

1．発表者名 中野区児童相談所 2年目の挑戦 子どもと家族を中心に ～子どもアドボケイト・一時保護所・心理支援・SofS～
2．発表標題 阪無勇士・神谷万美・加藤仁美・森田美穂・鈴木浩之
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会第29回学術集会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------